

「一人一人を大切に保育」

藤野敬子 (元静岡大学付属幼稚園副園長)

一人一人を大切に保育を目指すようになった背景には、戦前、松山東雲学園というミッションスクールで、前半は、多様な選択肢があり、成績一辺倒ではなく個々の持ち味を生かす場の多い教育を楽しんでいたのに、後半、戦時下の弾圧で、画一化され硬直したものに変わられ、同じ遠足でも雲泥の差で、落胆したという体験があります。

戦後、早期教育が叫ばれていた頃、静岡大学の生物の丹治一義教授から、人間と他の生物との違いは、①自分で選択し、②自分でコントロールしないと生きていけない、③個体差が際立っており、もし、皆が同じことを考え、同じ行動をししか取れなくなると、惹かれ合うことも反発することもなく、全てが静止してしまい、人類は破滅すると伺いました。なぜ前半の女学校生活の方が、比較にならないほど充実していたのかが納得できたように思いました。

幼稚園でも、その子らしさを発揮しながら共に創りだしていく保育の模索を始めました。

(1) 個々に即した願い—入園当初の現れは多様です。マイナスと思えることも見方を変えれば、プラスでもあり、相手や場が変われば、変わるはずと理解し、気長く足取りを追います。十分、手と心をかけてもらってから自立し、温かく受け入れて貰って、自分から他者に目を向けていきます。断片的、衝動的だったものから意図的で組織的なものへの移行も、各自が深く関わる経験を通して、さまざまに図ります。

(2) 共に創りだしていく計画—将来必要だから今これをという引き算方式ではなく、今を充実し、子どもの思いを生かせる足し算方式を多くし徐々に先の見通しをもって相談する形も増やします。大人の予想もしない子どもの発言で、思いがけず豊かな活動が生まれます。

(3) 一人一人の出会い、多様な人々とも出会える形態—まず家庭訪問で出会い、最初の日は入園式ではなく、少人数(園児の4分の1)が集まり、年長の遊ぶ姿を見ながら過ごし、自分で好きなものを見付け、第一歩を踏み出します。その後も時々、少人数づつ居残って、最初の弁当、買物、料理、運動、絵本作り等を、異年令の友達や担任以外とします。保護者や小中学生、地域の人々とグループで遠足や見学、畑や大工仕事等、見習いながら楽しみます。

既にある園生活の営みの中へ、新入りが一人二人入ってくるというのは、寺子屋や英国のインファントスクールの方式です。同年齢のクラスだけでなく、多様な人と出会う場合は、家庭や地域の環境が一変した今の子どもに必要です。

固定した友人関係が、好転するきっかけにもなり、心底、畑やスポーツ等の好きな大人との出会いで、子どももいつになく熱中します。

(4) 選ぶ余地が多く、自分でコントロールする園生活—同じ活動でも任せる部分を多くすると、個々の多様な現れが見られ、ドラマが生まれます。選択肢が多いので、それぞれに適した活動になります。また、手遊びや音楽を使って条件反射で片付けたり、話を聞かせたりしていると、その条件のない小学校では通用しません。その都度叱られるよりは、具体的に、例えば「入らない目印」等を提示して徹底すると、自分で判断しながら決まりを守り、やがて自分達でも、必要な時、それを使ったり、話し合っただけで決まりを作り始めます。

(5) ねらいの項目毎に担任が評価するのではなくて、エピソードで個々の生きた姿を幅広く伝え合い、他の教師とも互いに見方を深めていきます。—エピソードは一人の子どもが主人公です。日々変化する姿が分かり、内容も、ユーモアあり、涙あり、笑いもあって多彩です。

因みに大学生に園生活で最も印象に残っている思い出が、教育要領の、どのねらいに該当するか調べさせた所、どこにも当て嵌まらない、微妙な場面が圧倒的でした。保護者へも、エピソードで伝えると、共感が得られやすく、一緒に対処しようという姿勢が生まれます。

(6) 家庭や地域と共に育ち合う—子どもだけの世界も減少したので、園では担任を離れる場や時間も確保し、代わって、園のスタッフが手分けしてそれとなく見守ります。障害児や日本語の通じない園児の存在が増えたことが、無意識にしていた保育を変える契機になります。保護者と共に園庭を整備して以来、横に並んだ形の協力関係が生まれ、教師では思いつかない幅広い活動になります。今は、環境の変化で問題が山積していますが、よりよい保育へ脱皮する機会に生かしていけたらと願っています。

箱根学習会報告

「学習指導要領等の一部改訂」を

どう受け止めるか

期日 平成15年12月26日(金)～27日(土)

会場 箱根湯元ホテル

日程 <12月26日>

講演 ①

イギリスでの研究結果を踏まえての
習熟度の研究

立正大学講師 佐伯知美先生

ゼミナールA 東京学芸大学教授 浅沼 茂先生

ゼミナールB 立教大学教授 奈須正裕先生

<12月27日>

講演 ②

子ども理解と生きる力をはぐくむために

前静岡大学付属幼稚園副園長 藤野敬子先生

講義 ①

総合学習における体験とは…

東京学芸大学教授 浅沼 茂先生

講義 ②

学習指導要領等の一部改訂について

立教大学教授 奈須正裕先生

講演 ①

イギリスでの研究結果を踏まえての

習熟度の研究

立正大学講師 佐伯知美先生



イギリスに留学され、そこでの習熟度の研究の成果を(1)イギリス(以下 UK)における教育制度(2)UKにおける習熟度別クラス編成について(3)UKの初等学校で採用されている習熟度別クラス編成の種類(4)児童の習熟度別クラス編成に対する児童の意識(5)UK学校に見られる習熟度別クラス編成の例と児童の意識調査(6)日本の中学生が見た習熟度別クラス編成の長所と短所で話された。

興味深い点は、日英両国の生徒の習熟度指導に対する感想である。どちらもおおむね好意的に受け止めているが、英国では学校によって受け止め方に幅がある。習熟度別という形態を、学校やクラス、子ども同士の雰囲気ではかき切れていないという状況があり、グループによって

からかいもあるとのことである。クラス編成の方法と生徒の態度は関係がなく、クラスの雰囲気や大人の言葉掛けに左右されてしまうので、生徒のよい面を強調し、ほめたり、生徒が適切な支援を求められるような環境整備が必要だとしていた。

日本の場合にも一部に友達関係への影響や差別感、授業進度についての不安を訴える回答が寄せられている。習熟度のよさを伝えていくには、教師が習熟度についてきちんと生徒に伝え、話し合っていくことが大切であり、プレテストでこまめに診断をしてクラス分けをしているのがよいのではないかとしている。そして、学年教師の間での連携も大切であり、学校や学級での受容的なコミュニティを作ることである。習熟度別指導を行う際には、よりよい人間関係を作ることが大切であり、学校の雰囲気や習熟度別クラスに影響を与えるところが大きいというのが、日英両国の生徒の感想から求められる示唆であるようだ。(文責 中田)

ゼミナールA

「学校教育と学力」

東京学芸大学教授 浅沼 茂先生



浅沼先生は、中教審答申案(平成15年9月)を受けて一部改訂された学習指導要領の今後について話された。

今回、「ゆとり」が消え「確かな学力」が強調されたが、しかし、もう一つの柱である「生きる力」は残された。よって、学力低下論に対して後退したのではなく、一步下がって二歩進んでいるのではないかと浅沼先生の言葉は印象的だった。「総合的な学習」については、目標や内容を一層明確にすることが強調されるとともに、「個に応じた指導」の一層の充実も挙げられているということであった。

その後、習熟度別指導や少人数指導について話し合われた。どちらも学力低下論に対する一つの方法として挙げられるが、結論としてはクラスを分けることが効果を上げるのではなく、教師と生徒のコミュニケーションがあつてこそ、有効といえるのではないかとのことだった。評価の在り方については、なかなか結論に達す

ることはできなかったが、大きな負担となる評価方法の見直しは図られていくべきではないかとしてまとめられた。

(文責 石澤)

ゼミナールB

立教大学教授 奈須正裕先生

南アルプス市立落合小学校の藤巻先生の「高齢者と交流して、人の気持ちが分かるようになる」という実践



を基に話し合いが行われた。クラス全員で1学期にはマニュアルを作り、自分たちの歌える歌をたったり自分たちのことを話したりした。2学期に施設の人の言葉などから交流の方法を考え直し2回目の交流を行った。自然な交流になり始めたが、振り返りではマイナス表現が多く感情が入っていないものが多かった。3回目になるとより自然な交流になり、振り返りでも固有名詞が入り、感情が入って老人に対するプラス表現が増えた。休日にグループで交流する子もいた。3学期には訪問で子どもがつぶやいた「年をとりたいくないなあ」という言葉を取り上げて考えていく予定である。学習内容を質的にとらえるために評価規準を作る。評価計画を作り学習内容を量的にとらえるために評価基準を作成し、さまざまな資料を活用して評価している。

話し合いの中で、奈須先生からは体験するだけでは問題解決にはならず、活動のめあてが腹に落ちていないと問題解決にならない。体験の内容分析ができていくことが大切である。ボランティアは卒業までやる腹積りのないものなら止めた方がよい。みんなで決めたことはやるべきことであり、協力すれば何とか解決できることなければならない。この実践はボランティアが彼らなりに腹に落ちている。年間計画を作る上で一番安全な方法は子どもと話し合っ創ることであると話された。

(文責 加藤)

講演 ②

子ども理解と生きる力をはぐくむために

前静岡大学付属幼稚園副園長 藤野敬子先生

藤野先生は自分の学生時代の経験から、なぜ子ども達と共に生き、子ども達の個性を生かした保育をしようと思ったかと話し始められた。

先生が実践された保育園では①一人一人の出



会いを大切にするために、入園式の日初めて先生や在園する園児と出会うのではなく、家庭訪問・園での少人数の園児や先生との遊び・園長

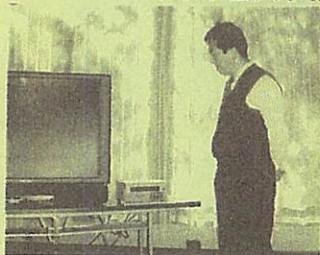
との出会いがあったから入園式を行った。②子どもが活躍する場を大切にする。そのためにパートナーの年長児が身体測定をやって見せて、入園児の身体測定を行い、年長児が手伝いをする。また、園めぐりもパートナーの子の気が向いたときに案内をさせるなど、いろいろなレベルの活動を用意してきた。③先生も園児も共に育ち合うために、項目評価からエピソード評価に変えていった。これはその子が主人公となり教育要領にない内容まで含むことができ、先生方の見方も広がってくるからである。また出来事は関係が変われば変わってくるからである。④「生きる力」を育てるために、多様な自然や園児だけでなく小学生や園長・事務員さん・ハンディのある子・学国籍の子など多様な人と関わらせるようにした。また、子どもとともに活動を創り出すようにした。その中で誕生会の活動からケーキ作りの活動が産まれたり、動物園の見学をグループで行ったり、いつ出演してもいい音楽会などを行ったりした。⑤個々の願いに即した活動を足し算方式で実施することなどを事例豊かに話された。

(文責 加藤)

講義 ①

総合学習における体験とは…

東京学芸大学教授 浅沼 茂先生



体験とは何であるのか・体験学習はなぜあるのか・学習において体験はなぜ必要であるのかと、総合学習における体験の必

要性について問題を提起された。プラグマティストにおける体験の考え方やアブダクション(仮説的推論)などから体験の重要性を話した。その後横浜市立大岡小で行われた総合学習における話し合いの授業のビデオを示され、話し合いの中で共通体験の必要性はどのくらいあるのだろうか、この授業はアブダクションが行われ

ていると考えてよいのだろうか」と投げ掛けられた。これを受け体験の意味とは何かと話し合いが行われた。(文責 加藤)

講義 ②

学習指導要領の一部改訂について

立教大学教授 奈須正裕先生



前日文部科学省から発表された指導要領の一部改訂について話された。この改訂は、現指導要領の「一層の充実」ということが基本であり、これまでの方針に変更はない。基準性については歯止め規制が残されるが内容が変わり学校に任ず部分が出てきた。個に応じた指導では例示にいくつか付け加えられた。総合的な学習の時間では教科等の学習が総合的に働くようにする「知の総合化」というねらいが付け加えられた。このことにより、教科と総合学習は対立しないことが明確になった。さらに目標と内容を各校で定めることと全体計画を作成することが明示された。また例示されたことをすべて実施する必要はないと考えられると話された。

(文責 加藤)

(文責 加藤)

四国個性化教育研究会冬季研修会報告



平成15年4月に発足した四国個性化教育研究会は、本年1月24日に香川大学教育学部附属坂出中学校に

て、冬季研修会を開催した。

実践発表では、まず高知県の上田雅子教諭から、6年生の総合的な学習で取り組んだ、木を生かした学校改造から自己評価力を高めるためのポートフォリオの活用の仕方について発表があった。学習の始めに、児童自身が今年はどうな力を身に付けたいのか、どう成長したいのか目標を宣言し、最後にどう成長したかを自己評価並びに他者評価(教師・友達・ボランティア先生)することで、児童の評価能力の育成を図

ったという報告であった。次に、高知県の野村ゆかり教諭からは、4・5年生の総合的な学習の取り組みから、龍馬が生まれた町記念館作りに参画することを通して、地域の大人たちや鳴門教育大学の学生・学芸員などに関わり、児童のコミュニケーション能力が培われたという発表があった。また、地域を大切に思い、地域をよりよくしていこうという意識が児童の中に高まりつつあるということも大きな成果である。最後に、香川県の大林弘明教諭から、数学における少人数指導の取り組みとその効果(中学1年生)についての発表があった。個に応じた指導は、「補充的な学習」と「発展的な学習」により充実が図られる。そのための指導の手段として、少人数指導が有効であると考え実践した。学習指導を通して、「自己評価能力」の育成を目標の一つとして掲げ、ひいては「生きる力」を備えた生徒の育成へとつながると考えている。そのために、「学習目標シート」を生徒に提示し授業の見通しをもたせることや、「学習カルテ」による自己評価(今日の授業で何が分かったか・何が解けるようになったか)を行った。その結果、生徒個々の実態に合ったきめ細かい指導が展開され、生徒の数学に対する意欲・関心が高まり自主的な学びにつながり大きな効果が得られたことが報告された。

講演では、全個連会長の加藤幸次先生が、「少人数指導・習熟度別指導の在り方と課題」という演題で話をされた。習熟度別指導がうまくいくポイントとして、①教師の本気の姿勢②学校の体制の在り方の2点があげられた。課題として、子どもの半分くらいが賛成。残りはどうしても良いという反応を解決することであると締めくくられた。参加者約80名の中開催された研修会は、大変充実したものとなった。

(事務局長 谷本 和子)

事務局への問い合わせ・連絡先

〒299-0245 千葉県袖ヶ浦市蔵波台7-22-4

三浦信宏 Tel&Fax0438-63-5319

mail:minobu@beibe.ocn.jp

http://www.ns-da.com/aaa/zenkoren/index.html

全国個性化教育研究連盟会報

第68号

平成16年3月28日発行

編集責任者 事務局長 奈須 正裕

編集 広報部 加藤 勇